

社会福祉学会 News letter

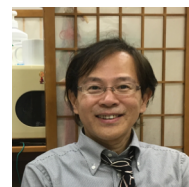
第19号 2018年2月28日発行 長崎国際大学社会福祉学会（代表・坂本 雅俊）

長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7 長崎国際大学 坂本 雅俊 研究室 TEL0956-20-5519



新年度を迎えるにあたって

学科長 坂本雅俊



“2018 年を迎え、初春を寿ぐ雰囲気の中、試験や論文審査や卒業判定を行う時季”となりました。介護福祉士は本年度から国家試験受験がはじまり、社会福祉士、精神保健福祉士と合わせて3つの国家試験に学生は取り組んでいる時期でもあります。

読者のみなさまはお変わりありませんでしょうか。

皆さまがご多幸でありますことを新年にあたりましてお祈り申し上げます。

さて、大学内では、マナバフォリオ（ポートフォリオともいいます）が本格的に稼働しています。レポート課題や宿題を教員が学生に課したり、その提出もこのなかで行うことができます。出席管理から成績の提出などすべてネット上での対応となりました。特に「目指せ100冊」という「読書管理システム」を通して、学生が卒業までに100冊の本を読み、その感想に教員がコメントを返すという仕組みも本年度の入学生から全学的にスタートしました。このマナバ上の読書管理システムは、使用するなかで不具合な点を集約し、大学独自でバージョンアップさせて稼働する方法をとっています。今後数年後の学生の学力向上とつながることを期待して取り組んでいます。

この取り組みのよいところは、読書は魂の師、生涯の伴侶と言われるように、思春期から青春にかけての読書は人間形成に必要な行いであり、また、どれだけたくさんの“良書”と出会えるかということは、学生の人生における一大事として捉えていることです。

そこで、教員が推薦図書を挙げ、学生が手にできるように図書館に配置されるなどの配慮も同時に行っています。振り返ると昭和初期までは、司書による「良書の選択眼」により市場に出回るものは選定され、更に読者の厳しい選択によって俗悪書や文章下手な作者の読み物は淘汰されていたような気がします。しかし近年、出版文化としての矜持は薄れ、ビジネスとして売れるものなら合法であれば何でも世に出してきます。良書と呼ばれるような専門書でも3千冊の販売がやっとなのであるという今日、エディターの思いは、「魂の師となる良書を読むには高い語学力と努力を要する、そして出版文化とはそれへの奉仕である」と胸を張ってきた先輩編集者である文化人達の言葉を今も思いだすそうです。

読書習慣の成果は、我々の精神の強靱性を養っていくことです。そして、学生にとっては3福祉士の国試取得への強い意志につなげていくことが「教育者としての願い」です。

さて、今回は、リオオリンピックやボブさんのノーベル賞受賞の話題を紹介しました。その後、6名の社会福祉学科教員が本年度から着任され、新たな学科文化の歩を進めはじめています。前回と同じしめくりになりますが、社会福祉学会のホームページや同窓会のフェイスブックを覗いてみてください。社会福祉学科が成熟期を迎えるのは、まだまだ先のこともかもしれませんが、もし、変わったものや変わらないものがみつかったら、そのことを肴にして、みなさんが大学に来たときに語りあいませんか。



研究室レポート：安藤研究室 便り



こんにちは！私は、大学を卒業後、大学院に進学したのですが、すぐに大学院での生活が窮屈に感じられて、精神保健福祉士として働きながら学ぶという選択をしました。これまでに精神科病院や、精神保健福祉センター、精神科クリニック、地域生活支援センターなどで勤務してきました。

そのなかで、摂食障害やひきこもり、家庭内暴力、統合失調症、社会不安障害などを呈する若者と出会ってきました。彼らとの出会いのなかで、彼らは育つ場を奪われているのではないかという問いをもつようになりました。育つ場とは大それたものではなく、ごくごく日常的な会話—例えば「昨日、何のTV見た?」「今〇〇が欲しいの」「友だちにこんなこと言われた」「家族と喧嘩した」「バイトで褒められた」などで構成される場です。

私たちは日々、無数に交わされる日常的なやりとりによって生活をし、育っていきます。しかし、障害や病気によって、他者とのかかわりが制限され、日常的なやりとりは大幅に減ってしまいます。それが何年も続けば、育ちに大きな差異が生じます。残念ながら、こうした育ちへの支援が十分に機能しているとは言えません。

私は、彼らの育ちを保障するためには、仲間づくりが必要であると考えています。「仲間のなか

で育つ」ことが、日常的なやりとりを彼らの生活に取り戻すことだからです。そのため、彼らが仲間づくりの中でどのように育っていくのかを明らかにする研究をおこなっています。

今年度、ゼミでは、ボランティア活動企画コンテスト・自由企画の部で最優秀賞を取り、この企画を12月に実施しました。当初、中国人の母親とその子どもたちを対象とし、中国人の母親たちとキャラ弁づくりをすることにしていました。なぜなら、中国では、お弁当は一般的ではないため、お母さんたちはつくったことがなく、さらに日本ではキャラ弁が一世風靡をしているため、子どもたちにお弁当をもたせることへのハードルが高すぎて、お弁当が必要な日は子どもたちを保育園に連れて行かないという状況のお母さんもいたためです。また、中国人のお母さんたちから、日本人の母親と交流をしたいという依頼があり、日本人のお母さんたちも参加してくれました。子どもたちは学生とゲームを通じて楽しく過ごしている一方で、お母さんたちは日本での生活で疑問に思っていることなどを、お弁当づくりを通じて話し合っていました。今後も、互いに交流をおこなっていく予定である。

(安藤佳珠子)

研究室レポート：石橋研究室 便り



皆さん、始めまして！看護の現場から、平成29年4月より社会福祉学科に就任いたしました、石橋亜矢と申します。

本学科における私の専門科目は、「認知症の理解」「医療的ケア」「介護概論」等です。福祉が専門ではありませんが、認定看護師、介護支援専門員等の資格を持ち長年、看護の現場で勤務しチームアプローチを大切にしてきました。本学では、多くの専門的な知識を持たれた先生にご指導頂き、学生のみなさんの指導をしているところです。

本学に赴任して半年以上が過ぎ印象深いのは緑豊かな木々に囲まれた明るいキャンパス、意欲と情熱を持たれている学生さん方と教職員方の姿がととも眩しく映ります。これまで、医療の世界で真っ白な閉塞感を感じる建物の中で慌ただしくかけずり、患者様の死に向き合ってきました。人は大切な命を授かり、必ず平等に尽きる時がきます。現場で多くの患者様との別れがありましたが、その中で目には見えない、人としての優しさや思いやりといった互いに尊重し合う気持ち（心）を教わりました。このことは、当大学のモットーであ

る“ホスピタリティー精神を大切に”の意味と同じで、学生さん一人一人との関りの中で今、私自身が最も大切にしていることです。

さて、私自身の研究に関しましては、我が国の大きな問題としてがん患者の増加による医療制度の変化に伴い在宅医療を国は推進されていますので、在宅における医療スタッフのストレスについて研究を行い、ストレス対処に向けた基礎資料の貢献ができればと考えています。今後、病院、施設、在宅の現場では、介護、看護、福祉を提供するものの様々な専門性が求められます。そこでこれまでの経験を活かし、多くの学生さん方に専門職としての感動をお伝えし地域貢献に努めていきたいと思っています。

この大学で皆さん方との新しい出会いを大切に、今ある時間を大切に精進していきたいと思います。最後になりますが、皆様方からのご指導・ご鞭撻を受け賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(石橋亜矢)

研究室レポート：野田研究室 便り



一緒に、ただひたむきに

平成29年度から社会福祉学科の講師になりました野田健（のだけん）と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私は学生時代、サッカー部に所属して毎日ボールを追いかけており、サッカーのことしか頭になかったサッカー少年でしたが、高校卒業間際に阪神淡路大震災が起き、テレビで流れる映像にただただ言葉を失い、無力感に襲われたことがきっかけで福祉系大学に進学しました。そして、高齢者デイサービスセンターで介護職として3年半勤務し、大学院をはさんで介護福祉士養成に携わる機会を得、教員としてこれまで務めてまいりました。

そうした経歴もあり、私の専門は介護福祉養成（教育）、倫理・哲学です。今現在は、「介護福祉士は専門職なのか」という問いに答えるべく研究を行っております。時折、これまで出逢ってきた方々と連絡を取るのですが、介護職時代の同僚は今も現場で色んなジレンマを抱えながら献身的に活動し、介護福祉士養成時代の教え子もサービスの質を向上させようと懸命に努力している話を耳にします。そうした共に歩んできた仲間の頑張りの後押しが少しでもできればと思い、日々教育・研究活動に努めております。

今まで関東信越地域におりましたので、長崎県

は右も左もわかりません。

また、大学教育に携わることもなかったので、何もかもが新鮮です。もちろん、研究室を持つことも初めてです。初心に返るところか、一からのスタートですが、私自身がこれまで培ってきた精神を前面に出していけたらと考えております。

高校サッカー部時代の「走れ、せれ、ねばれ」。大学時代の「Not for him, but together with him」。介護職時代の「人間大好きになれ、笑顔を絶やさない、感謝の気持ちを忘れるな」。大学院時代の

「Think globally, Act locally」。介護福祉士養成時代の「ハートのある人になる～手と手をつなぐ」。そして、これらの精神が本学のホスピタリティーと結びつき、辿り着いた1つの結論「一緒に、ただひたむきに」。これが今の私のモットーです。

これから先、研究室という場を拠点に、少しずつ皆様と「一緒に、ただひたむきに」取り組み、少しでも多くのギフトを社会にお送りできれば幸いです。沢山ご迷惑をお掛けすると思いますが、どうかお力添えを賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

（野田 健）



研究室レポート：金澤研究室 便り

初めまして。この4月より社会福祉学科に着任いたしました、金澤由佳と申します。

専門は、司法福祉で、主に「精神障害者※による犯罪」や「触法精神障害者の社会復帰」について研究しています。これまで、東京にある病院兼研究所にて精神鑑定に携わり、その後、東京の大学で教鞭をとって参りました。初めての九州での生活に戸惑うこともあります。本学の教職員、学生、さらには地域の方々に支えられ充実した毎日を過ごさせていただいております。キャンパス内はいつも学生の笑い声が聞こえ、明るく声をかけてくれる学生ばかりです。また、教職員と学生との距離も近く、人の温かさというものを日々感じております。

では、私の研究について簡潔に紹介させてい

ただきます。冒頭に記しましたが、私の専門は、司法福祉です。狭義の研究テーマは、「障害者」かつ「犯罪者（おそれのある者を含む）」である「（触法）精神障害者」に対する強制的な医療です。なぜ「精神障害者」本人の意思に反してでも精神科病院に入院させることができるのでしょうか。日本では、開放医療や退院促進が掲げられている一方で、強制的な入院制度は長年継続しています。しかしながら、精神障害者を入院させることができる公式な科学的リスクアセスメントツールは存在していません。さらに言えば、仮にリスクを測るツールがあるとしても精神障害者を強制的に入院させることは人権の観点から大きな問題となります。

記憶に新しい2016年7月に相模原市の障

害者施設で発生した殺傷事件は何を物語っているのでしょうか。この事件を受けて強制的な入院制度の1つとされている措置入院制度に変革が起きるかもしれません。社会では色々なことが起こり、法制度、医学、社会資源、そして私たちの考えも変化します。福祉の専門家には、医療を受ける側がどのようなニーズや思いをもっているかをしっかり把握したうえで実践する“センス”が求められていると思われます。そ

のためには、法制度の正確な理解を大前提として、専門家ができること、また限界を十分に理解して課題と向き合っていかなければなりません。普段の講義においてもこのことは、常に念頭に置き学生にお伝えしていく所存です。

最後になりましたが、精一杯の教育と地域貢献をしたいと思っておりますので、皆様ご指導よろしくお願い申し上げます。

※ 法律上「精神障害」と漢字で記す。

(金澤由佳)

研究室レポート：Virág Viktor 研究室便り

多様性に対応できるソーシャルワークに向けて



平成29年4月より本学教員になりましたVirág

Viktorと申します。直前まで日本社会事業大学に身を置きながら、首都圏の大学を中心に教えてきました。

現在は、主に文化・民族的マイノリティとセクシュアル・マイノリティの福祉について研究しています。日本の場合、前者には、アイヌに代表される先住民族、在日コリアンなどの旧植民地出身者及びその子孫のような歴史的な少数民族（いわゆる「オールドカマー」移民）、より新しい「ニューカマー」移民、庇護希望者や難民、そして国際結婚等を通じて外国につながる背景をもつ人々が含まれています。また、後者は「異性愛者の男女」という狭くて、二分法的な枠組みに当てはまらないLGBTQ等の性的少数者を意味しています。

社会の中でマイノリティの立場にいる人々は、差別の対象になりやすく、不利益を被ることが多いです。日常から受ける様々な不利益は、社会的な脆弱性に結び付き、不平等と不公平の原因になり、当事者を被抑圧の状態に追い込むことがあります。そして、最終的には貧困や格差という社会問題、また社会的な不正義と人権侵害が生じてしまいます。

社会福祉士・精神保健福祉士のソーシャルワーク専門職は、このような問題の解決に取り組む倫理的な責任があります。しかし、当事者に対して強い権限をもつソーシャルワーカーなどの対人援

助の専門家は、無意識的にも逆に差別等を助長し、社会の中にある抑圧に加担してしまうこともあります。このようなことを避け、かつクライアント（利用者）がおかれている社会的な立場をよく理解し、それを踏まえて個々人の「かけがえのなさ」を重視した最適の支援を展開するために、文化・民族や性に対する感受性と力量を高めることが必要です。

研究の中では、このような多様性に配慮したソーシャルワーク実践及び教育の理論と、国内外のグッド・プラクティスの事例や政策・制度について重点的に扱っています。

また、近年の主要な社会活動として、日本ソーシャルワーク教育学校連盟（また旧日本社会福祉教育学校連盟）と日本ソーシャルワーカー連盟（旧社会福祉専門職団体協議会）における業務に加え、国際ソーシャルワーカー連盟アジア太平洋地域（IFSW-AP）の会長補佐とアジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟（APASWE）の理事としての取り組みを挙げることができます。

本学では、ゼミの他に、社会福祉士養成における講義・演習・実習を含めて、主にソーシャルワーク関連の科目を担当しています。

未熟な点を日々実感しておりますが、これからは大変お世話になります。必要に応じてご指摘・ご助言を頂ければ、とても助かります。どうぞ宜しくお願い致します。

Virág Viktor
(Virág Viktor)



研究室レポート：裴研究室 便り



初めまして。この4月より社会福祉学科に着任いたしました裴孝承（ペ ヒョスン）と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

名前からも分かるように、出身は大韓民国で、大学卒業までは韓国で生活をしていました。2007年から大阪市立大学大学院に留学し、博士課程修了までの約10年間、大阪で暮らしていました。佐世保は、もちろん初めて来ましたので、最初は右も左もわからず大変でしたが、先生たちの配慮や学生さんのやさしさに癒され、自然にも癒され、今ではとても素敵なおところだと感じています。

福祉に関心を持つようになったのは、小学校のころ、友だちのお母さんが亡くなったことがきっかけです。高額の治療費を払うことができず、定期的に治療を受けられなかったため、結局若いうちに亡くなってしまいました。その方は、貧しい状況であったにも関わらず、とても優しく明るい人だったので、当時小学生だった私にはかなりショックな出来事でした。どうにかできなかったのだろうかと思い、とても悲しんだことを今でも覚えています。

高校までは、楽器の練習やオーケストラ活動などに夢中でしたが、大学に入って社会福祉の面白さを知り、研究が好きになりました。悩みが多かった4年生のころ、講演のため韓国にいられた日本人の教授による「ケアマネジメント」「ニーズ論」

に関する研究を聴き、その内容に衝撃を受け、日本への留学を決心しました。それからずっと、日本に残って研究と教育活動を続けています。

現在の研究分野は、高齢者と児童であり、実証的研究を中心に行っています。大学院では、援助者に対するサポート課題について博士論文をまとめ、今も福祉現場におけるスーパービジョンの定着に向けて研究を続けています。今年は、佐世保市と佐世保市社会福祉協議会と本大学が共同で行いました「佐世保市の福祉推進の評価指標に関する量的調査」に参加させていただいたことがきっかけで、福祉に対する市民の意識が高いことを知り、佐世保市の福祉についても関心を持つようになりました。

その他の活動としては、長年日韓の国際交流事業を担当し、福祉現場の職員間の国際研修や視察を企画しながら、お互いの国の良さを共有しています。このような活動を通して、今後、東アジアのケアのスタンダードについて整理して行きたいと思っています。

まだまだ経験不足でご迷惑をお掛けするかもしれませんが、いろんな方と楽しく関わることが大好きなので、ぜひ研究室にお越しください。どうぞよろしくお願いいたします。

（裴孝承 ペ ヒョスン）



「日々頑張っています」

12期生 橋口 貴俊



こんにちは。卒業生の橋口貴俊です。

私は社会福祉法人長崎県社会福祉協議会にて、生活福祉資金貸付事業の業務に従事しております。

生活福祉資金貸付事業とは、低所得者、高齢者または障害者世帯に対し、資金の貸付と必要な相談支援を行い、世帯の自立を図ることを目的とする事業です。県社協は事業の実施主体として、県内市町社協よりあがってくる借入申請についてその必要性を見極め、必要に応じ貸付を行っております。

貸付の実施には、世帯に大きな負債を負わせるという負の側面もあります。「この世帯にとっ

ての自立とは何か」「貸

付がより適当な手段なのか」と悩む日々です。加えて難しいと感じる点は、貸付の必要性を書類のみで判断しなければならない点です。書類での判断となると、機械的な業務になりがちです。そのため、書類の向こう側には、実際に困っている世帯があり、その世帯を応援したいと頑張っている市町社協職員がいるということに思いを馳せながら業務に従事しています。

業務の性質上、「ありがとう」という言葉をいただく機会はあまりないですが、一つ信念として、頑張りたい住民や市町社協を全力で応援していきたいと思いながら、日々頑張っています。



「多くの出会いが、多くの道しるべとなる」

13期生 前田 美帆

こんにちは！私は、大学で介護福祉士と社会福祉士の資格を取得し、社会福祉法人江寿会サンホーム江上に就職しました。今年4月より新設されたグループホームにて、介護員として勤務しています。新規施設の為に、他の職員とは年齢も経験も違いますが、スタートラインが同じなので、和気あいあいとした雰囲気の中で、日々、利用者様のより良い生活に向けて切磋琢磨しながら働いています。

利用者様との関わりの中で、自分の対応が、「本当にこれで良かったのか、もっと良い方法があったのではないかと、悩む事も多くありますが、利用者様の笑顔や自分の声掛けが上手

くいった時の喜び、共有できることの感動など、介護の魅力を感じています。

今後も、利用者様1人ひとりにとって安心感を持って頂ける存在、心の拠り所となれるような存在を目指し、何事にも一生懸命に取り組みたいと思っています。

皆さんも大学で様々なことに、チャレンジし、経験と視野を広げてもらいたいと思います。そうすることにより、いろんな世代の人との繋がりが形成され、今後の自分の人生の糧となり、礎となります。多くの出会いが、多くの道しるべとなり、ある時は助けとなります。そういう存在を一つでも多く作ってほしいと思います。

国 家 試 験 に 向 け て

社会福祉学科国家試験合格支援委員会

今年度も社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験が近づいてきました。これに加えて今年度からは、介護福祉士養成課程の修了者にも国家試験の受験が義務づけられることとなり、介護福祉士国家試験（筆記）が2018年1月28日、精神保健福祉士の専門科目試験が2月3日、共通科目・社会福祉士専門科目試験が翌4日というスケジュールとなっています。

昨年度における本学新卒者の社会福祉士国家試験の合格率は、例年になく低い結果となりました（37名中7名合格、合格率18.9%）。本来、資格取得というのは、それを目指す学生一人ひと

りの問題であり、全体の合格率というのはその結果の集積にすぎないわけですが、それにしても、国家試験に向けた学生の学習や、学科としての学習支援のあり方などについて、大きな課題を突きつけられたのも事実です。

今年度は、このことへの反省に立ち、年度始めから、例年以上に力を入れて4年生の学習支援の取り組みを行ってきました。卒業論文の提出時期が昨年度よりも後ろ倒しとなった（10月中旬締切）こともあり、学生も教員もその両立に苦慮しましたが、それもうまく一段落し、多くの学生が真剣に学習に取り組む光景が多

くみられるようになってきました。学科としての合格率ももちろんですが、学生一人ひとりが資格取得ということに対して明確な目的意識を持ち、それに向けて精一杯努力するというそのプロセス自体が最も重要であることは、これまでと変わりありません。学科としても、自らの目標に向かって努力する学生たちに、最後までできる限りの支援を行っていきたいと思っています。卒業生のみならず、後輩たちへの応援、どうぞよろしくお願いいたします。

委員長 脇野幸太郎

お知らせ:

2017年度長崎国際大学学長裁量経費「意識向上事業」の一環として、11月より学生が進めてきた動画作成プロジェクトが終了しました。これからは、3月20日の世界ソーシャルワークデーに向けて国内外の業界団体のウェブサイトへの掲載を目指しています。以下は、その学生主導で出来上がりました「世界ソーシャルワークデー挨拶動画」のURLになりますので、是非ご覧になってください。 https://youtu.be/RHMmp1P4U_E